

病む現代人を救うミラクル・パワー

橘田 力 著

バナ・ウォーターで始まった
〈富士山伏流水〉

糖尿病ゼロ革命



インスリンを
使わずに血糖値が下がる！

バナジウムの類なき作用機序を

世界で初めて実証 (奥田拓道・愛媛大学
医学部教授による)



東洋健康新書

橘田 力 著

バナ・ウオーターで始まった

糖尿病ゼロ革命

——病む現代人を救うミラクル・パワー

東洋医学舎

豊かさの果てに糖尿病

●いま、もっとも怖い病気は？

「あなたが今、いちばん心配している病気は？」

と聞かれて、ガンを第一にあげる人が多いはず。なにしろガンは日本人の死亡原因のトップになった1981年以来、ずっとその座を譲らない業病です。毎年死亡する人の約三人に一人はガンだということですから（ちなみに1996年の全死亡者数89万6182人のうち、ガンによる死亡者数は27万1094人で30・2%を占めていますⅡ厚生省発表）、ほとんどの人が身近な人をガンで失った経験は持っていることでしょう。

ガンがとりわけ恐れられる理由は三つあります。

(1)ガンは相手を選ばない。

(2)ガンになる理由も、したがって予防法もほとんどわかっていない。

(3) 治す手段が限定され、しかも苦痛を伴い、治癒成績も芳しくない。

まさかと思う人がガンに倒れる悲痛さには忍びがたいものがありますし、薬石効なしという結果にはさらに耐えがたい思いをさせられますが、誰一人として「明日はわが身」の不安から免れることはできないのです。こんな病魔の理不尽さが、ガンをこの上なくおぞましいものにしていくでしょう。

ところが、ガンは治しやすくなってきた、と医療関係者の多くが断言しているのも事実なのです。その背景には、国立がんセンター中央病院の発表した治癒率（治療後、5年間再発しないケース）の改善——すなわち、1964年から73年までの10年間の治癒率は41%だったが、次の10年間は47%、その次の5年間では55%、さらに最近の5年間では59%になっている、といった数字があります。

また、日本人のガンはかつては胃ガンと子宮ガンが第一だったが、最近はそのらが減って肺ガンや大腸ガンが増えてきており、このことは生活環境などの因子を改善することによって、ガンの罹患が抑えられる可能性を示すものだ、という見方も行われています。

そのうえ、人口の高齢化が、ガンの罹患率や死亡率を高める最大の要因だと指摘する関係者も少なくありません。ガンによる死者数は確かに年々増えているが、年齢構成で調整した死

亡率（年齢調整死亡率）で見れば、十数年間の統計では1%台の微増を見たに過ぎない、というのです。

ガンはこのように、小さな数字の違いであっても大騒ぎをしなくてはならないほど、誰にとっても重大な関心事ですが、病気になる可能性からいっても、またその疾患のただならぬ性質から見ても、ガンに勝るとも劣らない問題を抱えて私たちの前に登場した疾病があります。

それは、新しい「国民病」と指摘されるようになった糖尿病です。

●日本人の10人に1人は糖尿病

ガンのような大問題を抱えた疾病と並べて、なぜここに糖尿病を取り上げようとするのか、その理由は簡単明瞭です。すなわち、①患者数が多い、②治しにくい、③深刻な余病を併発する、からに他なりません。

そして何よりも、その患者とその予備軍を合計すると、その数が日本人の場合には乳幼児まで加えた全国民の10%を超えてしまったと推定されるところに、座視できない危険性が潜んでいるのです。大問題視されているガンでも、正確な数字はわかりませんが、毎年の罹患者数（予備軍は含まない）は約50万人ほどと見なされています。

